
救われない二人のセカイ

音羽 鏑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救われない二人のセカイ

【Nコード】

N69340

【作者名】

音羽 鏑

【あらすじ】

自殺を決意した少女は妖精と出会う。

2人はお互いの事を知るうちに――。

少し切ない、人間と妖精の物語。

1（前書き）

初めて小説を公の場に投稿するので、色々と分かりにくかったり、読みにくいところがあると思います。

どうぞアドバイスや感想をよろしくお願いします。

私は、遺書を書いていた。

夕暮れ時、カーテンの隙間から入ってくる光が机の上を赤く染めて
いる。

時々ペン先が震えた。私はまだこのセカイに未練があるのだろう。

——何の救いもないこのセカイに？

しかし、私は一度も書くのをやめなかった。

『——さようなら』

最後に別れの言葉を綴って、私はペンを置き、丁寧に手紙を畳んで
封筒に入れた。

ゆっくり立ち上がり、椅子に上り、天井に付いている電灯にロープ
を縛り付ける。

そのまま、首に縄をかけた。

「バイバイ、私の人生」

目を閉じて椅子を蹴る。

「やめる——！！」

私しかないはずの部屋に、知らない少年の声が響いた。

私がびくつとした拍子にロープは切れ、私は無様に床に倒れた。

「いった……誰よ？私は死にたいの、邪魔しないでッ！」

死のうとした所を誰かに邪魔されて、私はヒステリーを起こした。

「ちよつと誰！？出てきなさいよッ！」

「……オレだ」

誰ともなしに叫んだ私の声に応えたのは、
妖精、だった。

「な、何よ……誰か隠れてるんでしょ？それで私が死に損なったのを笑ってるんでしょ？こんなオモチャで馬鹿にして——ふ、ふざけないでッ！」

「誰も隠れてないし、笑ってもいい。もちろんふざけてもいい。……ごめんな、邪魔して。お前の見た通り、オレは妖精だ」

「……う、嘘よ！妖精なんているわけないもの！」

パニックになって喚く私に、妖精と名乗ったその少年は深々と一礼した。

「死ぬのを邪魔したのは謝る。だけどとりあえず、落ち着いてくれ。オレだって、なんでこうなったのか分からないんだ」

「……わ、わからない、ですって！？人1人死ぬのを邪魔して、分からないですって？」

「……ああ」

少年は本当に申し訳なさそうな顔で頷いた。

「いいわ。いいわよ、こうなったらどうせ死のうと思ってたんだし、この茶番劇に付き合っただけあげるわ。あなたの言葉も信じてあげる」

「本当か？ありがとう」

少年はまた深々と頭を下げた。

私ははっとした。

——ありがとう。ありがとうなんて言われたのはいつだったろう。

そんなこと——ありがとうなんて言われたら、私は、

「泣いちゃうじゃない……ばか」

……せつかく張った見栄も、死のうとした想いも。

——ありがとう。

この一言だけでこんなに楽になれるだなんて思わなかった。

「えっ……お、おい」

焦ったような声が聞こえたが、私はもうどうでもよかった。

見知らぬ少年に泣くところを見られてもいいと思った。

「ごめん……今だけは、」

——今だけは、泣かせて。

熱い液体がとめどなく私の目から溢れて頬を伝った。
嗚咽が漏れる。

私は、子供のように泣きじゃくった。

少年は何も言わなかった。

「……もう落ち着いたのか？」

ハンカチで涙を拭う私に、それまでずっと黙っていた少年が尋ねた。

「うん。もう大丈夫。……ごめんね、いきなり泣いたりして」

「オレこそ、いきなり出てきたりしてごめんな。びっくりしただろ」

「うん……最初はね。でもそれももう大丈夫よ」

少年はそれを聞いて安心したように息をついた。

私はそんな少年を見つめた。

少年、と表現したが歳は18歳くらい。もしそうなら私より2歳上になる。綺麗な顔立ちだか表情はどこかいたずらっ子のような印象を受ける。

背は私よりも少し高く、まるで普通の高校生のようだ。

——ただ、足が床から少し離れていることを除けば。

「本当に、妖精なのね」

私が思わず発した言葉に、少年は頷いた。

「オレは妖精だよ。……って、信じてくれてなかったのか？」

途端にむすつとした表情になる。「だって……さっきのは勢いで言っちゃったんだもの。でも今はあなたが妖精だって、勢いじゃなくて信じるわ」

「本当に？」

疑うような目で見てくる少年に私はこうして笑うのは久しぶりだと考えながら微笑した。

「本当よ。だってあなたは私にありがとうって言うてくれたもの。人に幸せを届けるのが妖精なんでしょ？」

「……」

てつきり笑い返してくれるかと思ったが、少年は俯いた。

「……じゃない」

「え？」

聞き返すと、少年はきつと顔を上げた。

「オレは、そんないいやツじゃないんだ。オレは……」
でもそこで言い淀む。

「え？だつてあなた妖精なんでしょ？」

少年は私の言葉につらそうに目を伏せた。

「オレは……闇の妖精なんだ」

「は？」

少年は一度言い出した事で開き直ったのか、流れるように話した。
た。

「人間は妖精と聞くといいイメージを思い浮かべる。だけど、妖精だつていい妖精と悪い妖精がいるんだ——ちょうど、人間のように」
「そしてオレは悪い妖精の中でも死んだ人間の魂を保管する一族の妖精なんだ」

そこで少年が一旦言葉を切ったので私は口を挟むことができた。

「何で魂を保管することが悪いことなの？」

「何でつて？」

少年は胡乱な瞳を私に向けた。

「オレ達に保管された魂は天国へも、地獄へもいけない。ずっと死んだ時のままで、止められているんだ」

「でも、でも地獄に行くくらいなら保管された方が」

「まあ、地獄に行くのならそうかもしれないな。けどな」

少年は大きく息を吸った。

さっきまでの胡乱な瞳とはまったく違う真剣な瞳がこちらを見つめた。

思いがけず少年の髪と同じ美しい漆黒の双眸に私は見とれた。

「オレ達にその魂が喰われるとしたら、どうだ？」

「く、喰われるって」

耳に流れ込んできた恐ろしい言葉に、思わず声が震えた。

「まんまの意味だよ。オレ達一族は死んだ人間の魂を喰らって生き

てる」

ほらやっぱり、と少年は呟いた。

「この事言つて怯えなかったやつはいなかった。所詮お前も例外じやなかったって」

「例外よッ！」

自分でも予想していなかったほどの大声が出て私はうろたえた。

「何言つてんだよ、声震えてたくせに」

「そつ、それは……最初はびっくりしたけど今はそんな事ないわよ」
弱い所を正確に指摘されて私はムキになって言い返した。

少年は、私のそんなムキになった顔がおかしかったのかくすつと笑つたが、急に表情を険しくして怒鳴つた。

「……同情なんていらねえんだよ……」

私が怯んで二の句が告げずにいると、少年はさらに顔を真っ赤にして語気を荒くした。

「今までにだつて自分はそんな事気にしないと云つたやつはたくさんいたさ、ああそうだよ……！　そうやって最初は善人の振りをして、ずつといてくれたヤツがどのくらいいたか分かるか……？　0人だ！　お前だつてそうなんだろ……？　だつたらいつそのこと最初から突き放して、怯えて、逃げてくれた方が楽なんだよ、さあそうしろよ！　オイ！」

一息に言い切つてゼイゼイと息をつく少年。私はあまりの気迫に圧倒されていたが、じわじわと怒りが込み上げてきた。

「……勝手に人の言動を決めつけないでくれる？」

少年がびくつとした。まさか反論されるとは思つてもみなかったに違いない。

「なんかごちゃごちゃ言つてたけど、あなた私に、」

私に、

「ありがとつて言つてくれたじゃない！　そんな事言つておいて、突き放せだの怯えろだの拳句の果てには逃げろですって……？　そんなのずるいわ、卑怯よ！」

「卑怯、だと？」

敵意を持った少年の目を真っ向から見返して私は断言した。

「あなたは、何からも逃げてる臆病者だわ」

「……お前だつてそうだろ」

「……は？」

最初、私は何を言われているか分からなかった。

「お前だつて今、自殺しようとしてたじゃねーか」

「あ」

そういえばそうだった。この少年が現れたことで私はすっかり自分が自殺しようとしていた事を忘れていた。

結局、自殺しようとした私の決心はそんなものだったんだと思う。

私がすっかり忘れていたのを見てとっただし少年は1つため息をつくと、やっと年相応な少年の笑顔を浮かべた。

「しょーがねーな、お互い様にしておくか」

「そ、そうね」

ふと少年の顔がはつきりと見えなくなっていて、私はやっと外が暗くなっているのに気付いた。

もう2度と点けることはないと思っていた部屋の電気を点けて、私は立ち上がった。

「ねえ、あなた」

少年に呼び掛けると、数秒してから返事が返ってきた。

「あ？オレか？」

「そうよ」

答えると、少年は居心地悪そうに鼻の頭をかいた。

「そういえば、まだ名乗ってなかったよな。オレの名前はトモだ。

孤独の孤と書いて、トモ」

「私はサエ。冴え渡るの冴よ」

「じゃあ……冴、さん」

ためらいがちに私の名前を呼んだ孤に私は短く言う。

「冴って呼び捨てでいいわ」

「お、おう。オレの事も孤って呼び捨てでいいからな」

で、と私は仕切り直す。

「孤は人間と同じ物を食べるの？」

「ああ。基本的には同じだな」

「じゃあ夕ご飯食べるわよね」

ドアを開けてキッチンへ行こうとすると孤が慌てて走ってきた。

「おい、なんでオレが冴と夕ご飯食べることが決まってるんだよ」

「食べないの？」

私が聞き返すと孤は訳がわからないという顔をして言った。

「だって……オレは闇の」

「食べるの、食べないの？」

孤の言葉を遮ってもう一度私が訊くと孤は渋々口を開いた。

「……食う」

「じゃあ、好き嫌いはい？」

「……ない」

訊くことを訊くと、私はキッチンに向かった。

「孤、ご飯できたわよ」

私が自分の部屋に戻ると、所在なげな顔で座っている孤がいた。

「よかった。いてくれたのね」

「冴が夕ご飯に呼んだんだろうが」

「そっか、そうよね。じゃあ食べましょ」

ダイニングに入ると、孤が感心したような顔でテーブル上の料理を眺めた。

「冴、お前の料理うまそーじゃん」

「そう？食べたら期待外れにならない事を祈るわ」

「んじゃ、いただきます」

孤は礼儀正しく手を合わせてから食べ始めた。

「んー、うまつ！」

「ありがと」

しばらく孤は口の中に掻き込むようにしてご飯を頬張っていたが、ふとご飯を掻き込む手を止めて私に尋ねた。

「そういえば冴って、一人暮らしなのか？」

「そうよ。アルバイトして家賃払ってるの」

「ふーん。しっかりしてるんだな、冴」

力チャリ。

私は箸を取り落とした。

孤の言葉に、忘れかけていた記憶がよみがえる。

「……すっかりなんかしてないわ。すっかりしてたら私は、自殺なんてしてないもの」

食卓がしんと静まりかえる。

「食事中にその話はやめような。せつかくの冴のおいしい料理なのにもつたいないからな」

話は後で、と言われて私はゆっくりと箸を取り上げて食事を再開した。

孤は何事もなかったかのように相変わらずご飯を頬張っていた。

食事が終わった私と孤は、また私の部屋に戻った。

「なあ、冴。ここって屋上あるか？」

「？あるけどドアが壊れてて入れないわよ」

投げやりに私が答えると、孤はにやつと笑った。

「ちようどいい、そこにしよーぜ。話も聞かれる恐れはないだろ？」

立ち上がりかけた孤の服の裾を、私は慌ててつかんだ。

「私の話、聞いてなかったの？屋上のドアは開かないわよ」

「あ、そつか。人間は飛べねーんだった」

しまったな、と頭をかく孤。

「あっちゃー、どうするかな」

「もう、一人で上がってどうするのよ。独り言でも言うつもり？」

私の言葉を聞いて、孤はなにかいたずらを思いついたようにきらきらした瞳でこちらを見た。

「そうだよ。頭いいな、冴」

「え、まさか……」

「ベランダ借りるな」

私は悪い予感的中したことを悟った。

孤は私の気も知らずに機嫌のよさそうな顔で近づいてきて、

「きゃっ！」

私をいわゆる……お姫様だつこというやつで抱えあげた。

しばらく呆然としていた私も、孤がベランダに出たところで正氣に戻った。

「ち、ちょっと孤、あなた何して……！」

「暴れると落ちるからやめろよな、よつと」

一瞬ののち、私と孤は屋上にいた。暴れる暇もない。

「ほら、おろしたぞ」

「……あ、うん。ありがと……」

慌てて私は屋上のコンクリートの地面から立ち上がった。

「ここ、フェンスないみたいだから気をつけるよ」

「分かってる……でも、ここ縁に足をかけて座ったら気持ちよさそうよね」

つい私は屋上からの夜景の綺麗さに圧倒されて、縁に腰掛けて足をばたばたさせた。

孤は仕方ないなというように笑うと私のとなりに腰掛けた。

「なんだよ、冴も楽しんでるんじゃないか」

「だって、こんな綺麗な景色、楽しまないと悪いわ」

私の言葉に孤は不思議そうに首を傾げた。

「冴みたいなやつがどうして自殺しようとしたのかわかんねーな」

「私、みたいになって」

「オレは人間の気持ちがよくわかんねーけど、そうやって何かを綺麗だとか思う奴は人生を諦めたりしないと思うんだよな」

私は俯いた。

「……孤はそう言ってくれるけど、他の人は違うのよ」

「どういう風に？」

父にも母にも、ましてや友達に話せなかった、話したくないと思っていたことが孤と話していると不思議と自然に口から出た。

「私ね、昔から詩を作るのが好きだったの。でもね、友達みんな私を馬鹿にしたのよ」

——うわ、そんなの書いて恥ずかしくないの？

——そうやって夢見がちだから勉強ができないんじゃない？

「友達に馬鹿にされて、私は人前で詩を作らなくなった。夢見がちだって言われないように風景や色々な事も心の中から遮断して」

でも、

「でもね、そんな事しても一度貼られたレッテルって剥がされないのよ。私は普通にしたいのに、みんなが私を変わり者扱いして、避けて、しまいには私は1人になったわ」

理解者になってくれると思っていた両親も私が悪いと言って取り合ってくれなかった。

「でも、諦めずに両親に言い続けたら逆に気味悪がられてこんなアパートで一人暮らしよ。半分は両親が負担してくれてるみたいだけ

ど」

だからこのセカイは私を救ってくれないって分かったから自殺しようとしたの。

話を締めくくると孤は苦い顔をしていた。

「冴も大変だったんだな。でも、オレは冴を馬鹿にしないからな」
私はくすつと笑った。

「ありがとう、孤」

孤は照れたように鼻の頭をポリポリとかいた。

「じゃあ……オレの話か。まあ冴にはさっき喚いた時にほとんどぶちまけたからな」

頭を抱えてうなる孤に、私は質問した。

「じゃあ、孤。何で私の自殺を止めたの？」

「あー、その話か……」

言いにくそうに一瞬だけ孤は口ごもったが、一つ頭を振ると口を開いた。

「冴には、オレが闇の妖精で魂を喰らって生きてるって言っただろ？ オレ達は魂を一度持ち帰って必要な時だけそれを喰う。もちろん、魂はオレ達にとって食料だから取りに死んだ人間の所にも行く訳だ」

うんうんと頷く私をちらと見てから孤は話を続ける。

「だからな、冴。オレがお前の所に来たのは、お前が自殺して、死んだ魂があると思ってたからだ。」

「……で、でも実際は止めたじゃない」

「そうさ、オレは冴の魂を奪わなかった。いや、奪えなかった。だってオレは今まで一度も、人間が死ぬ現場にいなかったからだ。いつも人間が死んだ後に来てた。今回、早く来ちまって初めて人間が死のうとする所をみて、オレはオレのしてきた事を知った。」

ふつと孤は淡く笑って続きを紡いだ。

「ホント、馬鹿だよな。今までにさんざん死んだ人間の魂を奪ってきたのに、人間が死ぬ所は一度も見た事がないなんて」

「運が……よかったわねって、言うべきなのかしら？」

「誰が？」

私は小さく口元に笑みの形を作った。

「お互い、よ」

「へ？」

ぽかんと間の抜けた顔で孤は私を見た。

「私ね、今でも自殺したいって思うわ。この縁からひょいっと飛び降りれば死ぬことも分かってる」

「だけどね、と私は続ける。孤は静かに私の話を聞いている。

「だけどね孤。私、あなたに会えてよかったと思ってるの」

だからあの時、私を止めてくれてありがとうね、孤――

そう言った瞬間、私の体に強い衝撃が走った。

「きやつ」

頭がくらくらする。勢いよく孤が私を抱き締めたのだ。

「冴……冴。オレも冴に会えてよかったと思ってる」

「え……あ……うん、ありがとう孤」

私の頭の中はパニックになっていた。

「えっとー……あの、孤」

「ん？」

「す、少し苦しいのだけれど」

「あ、ごめんな」

孤ははっとしたようにぱつと私から離れた。目が泳ぐ。

「えーと、あの、アレだ冴。うん、これは……鬼の攪乱だと思ってくれ」

「へ？……何よそれ。おつかしいの」

くすくすと笑うと孤もつられてははと笑った。

しんとした夜の町の空に、私たちの笑い声だけが響いた。

次の日、起きてみると私の部屋の床に孤が寝ていた。

「孤、寒くなかったのかしら？」

ちやっかり私はベッドに寝ていたので寒くはなかったが、この季節、孤は大丈夫だったのだろうか。

「孤……大丈夫？」

そうっと呼び掛けても返事がない。死んでしまったのかと一瞬馬鹿な想像をしたが、すうすうという静かな寝息が聞こえるのを確認してほっとした。

「起きないわ……疲れてるのかしら。まだ寝かせておいた方がいいのかしらね」

私は、私の毛布をそっと孤にかけてから忍び足でキッチンに向かった。

朝食を作った後、静かに孤が起きているかどうかを確かめるために私は部屋のドアを開けた。

「孤……？」

「ん……ああ、冴か」

小さな声で呼び掛けると眠そうな声で返事が返ってきた。

「ご飯食べる？孤」

「冴のご飯？」

「そうよ」

「じゃあ食べる」

孤は即答して跳ね起きた。毛布が床に滑り落ちる。そこで何かに気付いたように振り返った。

「あ、そうだそうだ、この毛布、冴が掛けてくれたんだろ、ありがとな」

「いいわよ。私も気が利かなくてごめんなさい」

「あはは、いいっていいって。それよりご飯だご飯だ！」
弾んだ足取りで孤は部屋を出ていき、私は孤の後を追った。

その日、私は学校を休んだ。

私は、次の日も次の日もそのまた次の日も、ずっと学校を休んだ。もともと自殺するつもりだったので学校なんてもうどうでもよくなっていた。

たとえ行っただとしてもいじめられるのだからなおさらだ。

そして私は孤と時間を過ごした。

くだらない話もした。私の学校の事や孤の世界の話もした。毎日がとても楽しかった。

バタッ

「孤！どうしたの！？」

突然、家と一緒に掃除していた時に孤が倒れた。

私は急いで駆け寄り、孤を揺さぶった。

「触るなっ！」

びくっとして私は手を離れた。孤の体が重力に従って床に落ちる。

「ごめん……。訝。怯えさせるつもりはない……けど、少し寝させてくれ……」

「……うん」

「ありがとな、訝……」

孤は静かに目を閉じた。

「触るな……だっ」

私は自分のベッドに腰掛けて、眠っている孤を見つめた。

「な、何よ私。こんなの、いつもクラスのみんなに言われてたじゃないの。お父さんやお母さんにだって言われたじゃない。私にとつてこんな言葉、何でもないはずよ……」

笑おうとして失敗する。

「ばか……私のばか……孤に言われたくらいで、そんな……」
いつも言われていたはずなのに。

どうして孤に言われたくらいでこんなに悲しいのだろう。

「あ、れ……私、泣いてる？」

床に水がぼた、ぼた、と落ちる。

——ああ、そうか。

涙をとめどなく流しながら私は理解した。

私は孤が好きなんだ。

ありがとうと言ってくれた彼。

私の料理をおいしいと言ってくれた彼。

心が綺麗だと言ってくれた彼。

自殺を助けてもらってから好きになるなんて、まるで少女マンガの
ようだけど、私は孤が好きなんだ。

「ん……」

孤が小さくあくびをした。

「おはよう、冴」

にこりと笑う。さっきの必死さとはうって変わった態度だ。

「ごめんな、さっきは。冴、びっくりしただろ」

「あ、うん……」

「本当にごめんな。泣かすつもりはなかったんだ」

「え!？」

私は慌てて顔に手をやった。もう涙は出ていない。

「目だよ目。赤くなってる」

ウサギみたいだ、とからかう孤。もう、こうなったら開き直ってやる。

「そうよ、泣いたの。孤があんな事言うから」

「……」

孤ははつきりと刺された顔をした。

「あ、えっと、あの」

私は孤の反応に慌てた。

「ごめんなさい、何か傷つけたみたい……」

「……いや」

孤はゆっくりと首を横に振った。

「やっぱり冴には黙ってたらダメだよ……。うん、オレがさっき倒れたのは、オレが長い間、魂を喰らってないからだ」

「……あつ」

そうだった。孤は魂を喰らって生きていると言っていたのに。

なぜ私はそんな重要な事を忘れていたの——!

「……ごめんなさい」

「え?」

「ごめんなさい、私がいて」

鼻の奥がつんとして、目がかすむ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！私の自殺を止めたから孤は魂を手に入れられなくてこんなことになってるのよね！？私っ……なんて酷いことを……」

ぼろぼろと涙は溢れる。

「お、おい訝……確かにそれは当たってるけどな、そんなに頻繁に喰らわなくても大丈夫なんだぞ」

「嘘よ。孤は優しいから私を傷つけないように言っているんだわ」

「嘘じゃないって……だから本当に訝のご飯はおいしかったぜ」

こんなになつてまで孤は優しい。

「孤……ごめんなさいっ……う……あ……」

ごめんなさいごめんなさいと私は何度も繰り返しながら子どものように泣いた。

孤は私が疲れて寝てしまうまで黙って頭をなでてくれた。

「すう……すう……」

ことん、と冴の頭がオレの肩にもたせかけられる。

「困ったな……」

オレは途方に暮れて呟いた。

女の子を泣かせてしまった。

しかも冴を。

「もつと冴は甘えたっていいのに」

そう、今のうちに。

環境のせいもあつたのかもしれないが、もう少し甘えたっていいと思う。

「ま、オレの方がおかしいのかもしれないけどな」

一人で苦笑いする。

考えてみると、一族の中で今までに人間の魂を取ってくるのをためらった者はいなかった。

人間と会ってない者が1人もいないはずはないし。

そのうえオレは人間に入れ込んで一緒に暮らしてるっていうんだから「重症だよなあ……」

「……ふあ？」

呟いた声が大きかったらしい。冴がうつすらと目を開けた。

「孤、どこか痛いのか？」

「ちげーよ、大丈夫だ」

「そっか……ねえ孤」

声に心えて冴を振り向くと、肩にもたれたままの冴が、思わずたじろいでしまうほど近くで真摯な瞳を向けていた。

「孤は死んじやだめよ。もし死んじやいそうになったら、私の魂を

喰らって」

「おい、そんなことしたら冴が……」

冴はふるふると首を横に振った。

「私は死に損ないよ。死に損ないの魂を喰らうのをためらわないで。私は孤に生きていて欲しいの」

だって私は、と言って冴は大きく息を吸った。

「言うな。それ以上」

オレは冴の言葉を遮った。

冴が傷ついた顔をする。

「やめる。そんなこと言わないでくれよ冴。そんな自分を粗末にするようなことをオレは冴にオレのために言っただけ。オレだっただけ」

——冴が好きだから。

オレの言葉に冴は驚いて一瞬目をみはった。大きく見開かれた目がみるみるうるむ。

「ずるい……孤。私だって好きなのに孤のために何もさせてくれないなんて。孤ばかりずるいわ……ずるいのよ……っ。私だって……私だって孤に何かしたいの……」

オレのシャツのすそを掴み、だっ子のように泣きじゃくる冴をオレはそっと抱きしめた。冴が泣き止むまでオレはずっと抱きしめていた。

想いが伝わったのもつかの間、孤は倒れる回数が多くなった。

前は3週間に1回だったのが、1週間に1回、3日に1回、そして毎日。

私は幸せな時間の終わりを感じていた。

ふとしたことで泣くようになった。

孤は少し困ったような顔をするけど、いつも優しく抱きしめていてくれる。

今日もちよつとしたことで泣いてしまった。

いつものように孤は優しく私を抱きしめていてくれた。

私が泣くのが収まると、孤は私の髪を撫でながら口を開いた。

「なあ、冴」

「……なあに？」

「オレ、考えたんだ。……これからのこと」

私は耳を疑った。

「これからのこと？……だって、だって孤はもう……！」

声を詰まらせた私を安心させるように、孤はぼんぼんと私の背中を叩いた。

「そうだ、これからのことだよ。でな、冴。オレと」

——旅に出ないか。

「え……？」

一瞬、孤の言ったことが理解できなかった。

「なんかな、昔きいたことがあるんだ。人間の世界と妖精の世界の間には、永遠の生のある場所があるって。そこを探して、2人で暮

らせたらなっと思っんだ」

「でも、そこを探す前にもし孤が……！」

私は必死に涙をこらえた。

「まあ、その時はその時だな。でもな冴、1つだけ分かってほしいことがある」

孤は私の頬を両手で挟んだ。

「オレは、冴がどれだけ死にたいと思ってても、オレは冴に死んで欲しくない。生きている方が死ぬよりも何倍も辛いけど、オレは冴に生きてて欲しい。それで、オレと一緒にいてほしい。これはオレの勝手なわがままだけど、正直な気持ちだ」

どう？と訊かれて私はのどから震える声を押し出した。

「私だって……孤に死んで欲しくないの。孤だって今苦しんでる……」

……だから、私も生きる苦しみに耐える。……探しましょう、一緒に。そのセカイを」

「冴……」

孤は今まで見た中で、一番素敵な笑顔を浮かべた。

その笑顔がだんだん近づいて、ついには、

唇が重なった。

「!？」

重なった、と思った時、すでに孤の手が私の頬から離れていて、孤は後ろに倒れた。

「孤……孤っ！」

私は必死に孤を呼んだ。

今まで倒れてきた時とは違い、明らかに呼吸が早くなっている。

「孤！孤ってば！死なないでよ……！」

動かしてはいけないとは思うものの、孤を揺さぶってしまう。

半狂乱になって名前を呼ぶ声が届いたかのように、孤は目を開いた。

「訝……ごめん……オレ、もうダメみたいだ……」

「な……なんでよ……今、一緒に生きようって言ったのに！永遠の生のあるセカイを探すはずだったのに……！ひどいわ孤！」

頭では分かっているのに。もう孤を失うって分かっているのに。

どうしても諦めたくない自分がいる。

「イヤよ！孤、死んじゃイヤっ！私が死ねないようにしておいて自分は死んじゃうの！？ずるいわよ！孤はわがままだわ！」

どうでもいいことばかり言っで。引き止められる訳がないのに。

「孤ってば、ねえ孤……！」

口元に小さく笑みを浮かべたまま、孤は黙って私の叫びを聞いていた。

「ありがとう……訝。そんなにオレのことを思っでてくれて……」

「やめて、そんなこと言わないで！」

もう自分が何を言っているのかわからない。

「お願いだから……私を残して死なないで……」

孤は重そうに手を持ち上げた。私の頭をなでる。

「それはできないな、訝……でも訝、許してくれ……。オレは、孤

独の孤と書いてともって読む名前の通り、友達が今までいなかった、ましてや大切な人なんていなかった……」

「自分勝手だけど冴だけは失いたくないんだ……よ……」

私の頭をなでていた手が、ぱたりと床に落ちた。

ゼイゼイという荒い息。

「孤…孤っ……！」

私はその手をしっかりと握りしめた。

孤はそんな私を見て、小さく微笑んだ後、静かに目を閉じた。

——じゃあな、冴。生きてくれよ。

急速に薄れていく孤の手のぬくもりを感じて、私は深い喪失感に襲われた。

孤は行ってしまったんだ、1人で。

私を置いて。

ぼうつと孤の胸の辺りが光はじめた。

何か白い球体のようなものが胸から出てきた。

「これが……魂……？」

私が手を伸ばして孤の魂を掴もうとした時、

「その魂で何をなさるおつもりですか？」

横から突然見知らぬ手にかっさらわれた。

私は弾かれたようにその手の人物を見上げた。

まるでオーケストラの楽器演奏者のような豪華な黒いドレスを纏った

彼女は、口元に静かな笑みを湛えて私を見た。

「何をつて……私は孤と一緒にいたい。ただそれだけよ」

「まあ、お若いこと」

くすくすと女は笑った。

「何がおかしいのよ？」

けんか腰になった私が睨み付けると、女は口元から笑みを消して私に向かいあった。

「感傷に浸るのも程々になさいな、お嬢さん——いえ、冴さん。わたくしは孤の母です」

なんだって？

「わたくしは、ずっと孤が帰ってこないのを心配して人間界をずっと見てましたのよ。そう、あなた達をね」

声に静かな怒気が満ちた。

「孤が帰つてこないのも、今孤が死んだのも、全て貴女のせいじゃありません。あら、違ふとは言わせませんわよ？この目で見たのですから」

私は何も言えない。

「そんな貴女が被害者ヅラをしているのを見ると、わたくし、とても嫌な気分になりますの。はっきり言ってしまうと、不快ですわ。この魂を貴女から奪つたのは、貴女への報復と、母としての悲しみからですの」

お分かり？と母親は凄絶に笑った。

「……だめ」

「は？」

孤の母親は本気で分からないという顔をした。

「そんなわがママが通るとでも思っていらっしゃいましたら大間違いでしてよ」

「でも、通すの」

私は絶対に失いたくなかった。孤を。

「私は孤の魂が欲しいのよ。くれたら何でもするわ」

「馬鹿なことをおっしゃらないでくださいな」

孤の母は、呆れたようにため息をつくとふわりと浮き上がった。

「ちよつと、どこ行くのよ」

私が訊くと、孤の母はゆるりと首を横にふった。

「もう貴女とはお話しになりませんわ。帰らせていただきます」

「待ってよ。孤をつれていかないで」

私の言葉を無視して、孤の母はベランダへと浮いていった。

私は急いで孤の母の後を追った。

「待って、待ってってば！」

孤の母は構わずにベランダをこえた。そして振りかえる。

「もう孤を追うのはおやめになった方がよろしいわ。死んだ者に心を奪われているなど恐ろしいマネをするではありませんし、貴女にはその資格もないのですから」

すうつとベランダから離れていく。

「待って——！」

私はベランダの手摺りに足を掛けた。

足元が消えた。私の体が宙に浮く。

そして。

「きゃああああっ！」

どすっ

仰向けに地面に横たわる私の目に映ったのは、孤の悲しそうな顔だった。

「ごめんね、孤。私、生きられない」

わたくしは宙に浮いたまま、あの子——冴さんがベランダから私を追って転落するのを見た。

別に嬉しいとも悲しいとも思わなかった。

冴さんの魂が体から浮き上がる。

私は2人の魂を持って去った。

16（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

まだまだ他の小説も書いていきたいと思しますので、そちらもぜひ読んでみてください。

よろしかったら、感想やアドバイスをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6934o/>

救われない二人のセカイ

2010年12月7日23時10分発行